様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２２ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｈ０３２３１

研究課題名（和文）ポスト第一次世界大戦の時代としての現代史の再検討ー世界性と現代性の概念を中心に

研究課題名（英文）Modern History as the Post-First World War Age: A Reappraisal with Special Reference to its Globality and Modernity

研究代表者
山室　信一（Yamamuro, Shinichi）

京都大学・人文科学研究所・名誉教授

研究者番号：１０１１４７０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は京都大学人文科学研究所における平均して月2回の共同研究をベースとし、1大戦後の一世紀に及ぶ世界の変貌を見据え、大戦勃発百年を経た2014年の世界史状況を踏まえながら、2第一次大戦の何が現代史の基本的な枠組みを形成し、そして今日まで世界を規定し続けているのかを把握し、3そこからいかなる新しい道を見出すべきかを探ることを、課題として研究を行ってきた。代表者山室信一が平成19年より班長をつとめてきた京都大学人文科学研究所における共同研究班「第一次世界大戦の総合的研究」を基に、異なる地域/時代を専門とする研究分担者ならびに研究者コミュニティー間の知識の共有と認識の深化および人的交流を重視した。

研究成果の概要（英文）：The First World War was fundamentally crucial in the making of the world, in which we are living now, characterized by globalization and global divisions, fierce nationalism, total war system, and the development of technology beyond control. The main aims of this research project, based on eminars held fortnightly at the Institute for Research in Humanities, Kyoto University, have been as follows. to examine the century of post-First World War, ②to make clear which characteristics of the War have determined the nature of the modern world, ③to explore how we can get out of the current deadlock. This project has not only succeeded previous project, 'Inter-disciplinary Research of the First World War' (2007-2015), led by Shin-ichi Yamamuro, but also tried to assemble researchers in a wider range. Moreover, the project has taken part in such an international academic scheme as the compilation of Internet Dictionary of the First World War organized by the Berlin Free University.

研究分野：政治学

キーワード：現代　近代　人文学　第一次大戦　1970年代　21世紀

１．研究開始当初の背景
第一次大戦を契機として、戦争のグローバル化、科学・産業界までも巻き込んだ総力戦の浸透の中で科学技術崇拝は進み、技術開発競争は激化する。他方で「西洋の没落」が叫ばれ、理性への不信や教養文化の貶下も進行した。さらに国際連盟下において戦争犯罪概念が生まれるなど、現在でもわれわれは第一次大戦がもたらした衝撃の只中にいる。欧米においては、（第二次大戦ではなく）第一次大戦こそを本来の 20 世紀の起点と位置づけ、個々の研究者にはその総体をフォローすることも困難なほど膨大な研究成果が送り出し続けられてきた。しかるに、日本における第一次大戦研究の蓄積は、日露戦争や第二次世界大戦のそれと比べて貧弱であり、同時代の日本とその植民地に及ぼしたインパクトも、「現代世界」に対するその歴史的な意義も、充分に認識されているとは言い難い。また欧米においてさえも、戦争自体についての研究は大量にあるにせよ、必ずしも「世界性」および「持続性」について十全に明らかにされてきたとは言えない。例えば第一次大戦を視察した日本の軍人が「総力戦／持続戦（永久戦）」というビジョンを膨らませていき、それがやがてアジア・太平洋戦争に至るとか、この「永久戦争」のビジョンとは逆に「恒久平和」が模索されるようになって、第一次大戦後の国際連盟の成立になるといった、現代にまで至る事後的かつグローバルなインパクトを視野に入れない限り、ヨーロッパ国内戦争を超えた世界戦争としての第一次大戦の意味は見えてこない。本研究は、第一次大戦のこうした人類史的意義を問い直し、また「第一次大戦の世界戦争たる所以」を、非西欧（＝日本／アジア）の視点を導入することによって明らかにしようとするものである。

２．研究の目的
1914 年から始まった第一次世界大戦(以下、第一次大戦と略記）は、21 世紀の今日なおわれわれが生き続けているところの現代世界の幕開きを荒々しく告げ、現在に至る社会全般のありようを決定する出来事であった。本研究は、こうした一世紀に及ぶ世界の変貌をいかに捉え、そこからいかなる新しい道を見出すべきかを総合的に把握することを、その課題としている。とりわけ本研究が重視するのは、①その影響を瞬く間に世界中へ波及させて世界規模の社会の地殻変動を引き起こし（＝世界性)、②文化文明システムや生活様式のすべてを巻き込みつつ（＝総体性)、③21 世紀に至るまで世界史を規定し続ける（＝持続性）人類史的事件の嚆矢としての、第一次大戦である。

３．研究の方法
本研究の実施にあたっては、代表者である山室信一の統括のもと、①「世界性」、②「総体性」、③「持続性」の三つの分野を設け、それぞれ第一次大戦のアジアへのインパクト、文化の動員、戦後に第一次大戦が積み残した諸問題に焦点を当てた。遂行にあたっては京都大学人文科学研究所における共同研究班「第一次世界大戦の総合的研究」を中心とした。またベルリン自由大学の第一次大戦研究プロジェクトと連携し（エディトリアルボードをつとめた)、また 2016 年には国際シンポジウムを開いた。研究成果報告書については現在二冊の刊行を準備中である。

４．研究成果
本研究は京都大学人文科学研究所における平均して月 2 回の共同研究をベースとし、1 大戦後の一世紀に及ぶ世界の変貌を見据え、大戦勃発百年を経た 2014 年の世界史状況を踏まえながら、2 第一次大戦の何が現代史の基本的な枠組みを形成し、そして今日まで世界を規定し続けているのかを把握し、3 そこからいかなる新しい道を見出すべきかを探ることを、課題として研究を行ってきた。代表者山室信一が平成 19 年より班長をつとめてきた京都大学人文科学研究所における共同研究班「第一次世界大戦の総合的研究」を基に、異なる地域/時代を専門とする研究分担者ならびに研究者コミュニティー間の知識の共有と認識の深化および人的交流を重視した。

本研究においてとりわけ焦点となったのは、「第一次大戦とともに始まったエポックはいつまで続いたのか」という問題であり、現代史を考えるうえでの 1970 年代の重要性である。すなわち近代と現代の境界を第一次大戦に見て、そこから始まった現代が今日まで続いているという視点とともに、第一次大戦とともに始まった現代が 1970 年前後まで続き（第二次大戦後の冷戦時代においては、両大戦とともに確立された福祉国家的な枠組みが、西側においてはそのままずっと温存されてきて、しかしそれは 1970 年代に入って徐々に解体を始めた)、1970 年代とともにポストモダンが始まって今日に至っているという視点が、本研究の主要関心事の一つとなった。そしてまた、1970 年代から始まった時代をそれ以前から区別する要素の一つとして、「Humanities の危機」や「物語の危機」が検討された。つまり「大きな物語」（リオタール）への忌避感は、20 世紀終わりの約四半世紀より 21 世紀の今日に至るまで、人文学の諸領域を暗黙の裡に強く規定してきた心性の一つである。それどころか、大きな物語を語らない／語れないというプロットこそが、この半世紀弱の人文学の諸領域にとっての「普遍的な物語」だったとすら言える。他方で、本研究において重要な対象の一つである芸術創作においても、文化産業が相変わらず感動物語を大量生産する一方で、ポストモダンが喧伝されるようになる 1970 年代以後、大文字の「芸術」への懐疑、ユートピア（反ユートピア）を希求する前衛芸術の挫折、

社会への異議申し立てより身近なコミュニケーションへの傾斜など、同種の傾向が際立つようになる。「癒し」や「コミュニケーション」の流行は、近代芸術が標榜してきた「大きな物語の啓示」からの離反を示唆するものであろう。これらはすべからく、近代が目指した「世界を統合的に語る主体」の危機として同根であり、極力「語る主体」を消すことを通し辛うじて、人文学の場合は「学的客観性」を、芸術創作の場合は「社会的有用性」を、それぞれ担保しようとしてきたのがこの半世紀弱であるとすら言える。しかし合理主義的な脱主体化モデル（科学ないし経済モデル）への過剰な接近により、「語る主体の力」を完全に消してしまえば、もはや人文学はデータの収集提示ないし「語りの主観性（恣意性）を批判する語り（相対主義）」に、そして芸術は単なる文化的装飾品となるよりほかあるまい。そしてこれこそが今日の人文学ならびに芸術の危機を招いたとすら言えるであろう。

18 世紀啓蒙から 20 世紀前半に至る人文学ならびに近代芸術を貫いてきた欲望の共通分母として、①科学的合理性　②統合性（主体を通した「世界」への存在論的な問い）　③ユートピア性　を想定し、現代をこの三つの前提が崩壊しつつある時代と考えると仮定する。ならば　①客観的合理性という点で、「ことば」を支えとする人文学は自然科学にはかなわず、近代芸術もそれ自体が内包していた科学志向（音楽に端的に見られる）の故に、今や情報工学やテクノロジー（ニューメディア）等に呑み込まれる危険にさらされ、また　②一人の「主体」によって過去ないし現在ないし未来についての統合的な見取り図を描くには、今日の情報化社会においてはあまりにも大量のデータが氾濫しすぎており、そして　③ホブズボームが「地すべり」と呼んだ 1970 年代から徐々に理想主義の退潮が始まり、ベルリンの壁崩壊以後それが決定的となるとともに、近代の人文学ならびに芸術創作の生命線であったユートピア啓示のダイナミズムは決定的なダメージを被ったともいえる。人文学における様々な相対主義の台頭、統合的な物語の回避、細かな事実収集によるデータベース形成の流行、芸術における「アート」や「コミュニケーション」の流行、いわゆるメインストリームの消滅、「古典」の価値崩壊、サブカルチャーと従来の公式文化との相対化などはすべて、近代の人文学ならびに芸術が信奉してきた「世界を統合的に語る力」の失調状態のあらわれとみなすべきであろう。こうした現象（兆候ないし症状という言葉を使うべきかもしれないが）は、確かに第一次大戦とともに始まった時代が知らなかった何かであるという認識が必要であり、しからばそれはいつから始まっていたかという問いが立てられねばならない。

「近代はいつ終わり、現代はいつから始まったか」というこの問いを、第一次大戦ならびに 1970 年前後を歴史区分のランドマークとしつつ、「私たちがいま生きているこの混沌とした世界は、いつからどのようにして出現し始めていたのか」を問い直すことが、今後の重要な課題となる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　7 件）

① 藤原辰史、積み木の響き（上）、現代思想 44(1)、2016、30-38
② 藤原辰史、積み木の響き（中）、現代思想 44(3)、2016、20-15
③ 藤原辰史、積み木の響き（上）、現代思想 44(3)、2016、8-13
④ 野村真理、満州―ロシア人・ユダヤ人・日本人の交錯、ユダヤ・イスラエル研究第 29 号、2015、78-89
⑤ 田辺明生、〈史〉と〈詩〉のあわい―臼田雅之著『近代ベンガルにおけるナショナリズムと聖性』を読んで、現代インド研究第 5 号、2015、167-196
⑥ 中野耕太郎、第一次世界対戦と現代グローバル社会の到来―アメリカ参戦の歴史的意義、グローバルヒストリーと戦争、2016、107-136
⑦ 野村真理、正義と不正義の境界、ユダヤ人と自治、1 巻、2017、245-269

〔学会発表〕（計　　6 件）

① 野村真理、ユダヤ人ネットワークの実像と虚像―世界イスラエル連合から『シオンの賢者の議定書』へ、東欧史研究会 2015 年度大会シンポジウム「東欧史におけるネットワーク」、2015、大正大学
② Akio Tanabe、Understanding the South Asian path of development and democratization: Four perspectives on contemporary India、The 9th International Convention of Asia Scholars、2015、Adelaide, Australia
③ 坂本優一郎、ヴィクトリア朝の人びとと投資文化、日本ヴィクトリア朝文化研究学会第16回全国大会（国際学会）、2016、筑波大学
④ Akio Tanabe、“Various Forms of Money-use in Early Modern India: Money that Connects Diversities in Market, Society and Polity,”、The

Variety of Exchange and the Character of Money(国際学会) 、2016、Ecole Normale Supérieure, Paris

⑤ 藤原辰史、満州の「血と土」―農業、学問、戦争のあいだ、平和友の会207回学習会―戦争と学問を考える、2016、立命館大学

⑥ 藤原辰史、Food Technology under Cultural Changes in the East and West、SHOT 2016 in Singapore（国際学会）、2016、National University of Singapore

〔図書〕（計　6 件）

① Edt. Crispin Bates, Akio Tanabe, Minoru Mio, Human and International Security in India, London: Routledge, 2015, 189
② 山室信一、ユーラシア近代帝国と現代世界、ミネルヴァ書房、2016、280
③ 藤原辰史編、第一次世界大戦を考える、共和国、2016、275
④ 早瀬晋三、グローバル化する靖国問題 東南アジアからの問い、岩波書店、2018、248
⑤ 山室信一、アジアの思想史脈、人文書院、2017、374
⑥ 山室信一、アジアびとの風姿、人文書院、2017、390

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　0　件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
山室信一（YAMAMURO Schinichi）
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：10114703

(2)研究分担者
中野耕太郎（NAKANO Kotaro）
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：00264789

藤原辰史（FUJIHARA Tatsushi）
京都大学・人文科学研究所・准教授
研究者番号：00362400

小関隆（KOSEKI Takashi）
京都大学・人文科学研究所・教授
研究者番号：10240748

野村真理（NOMURA Mari）
金沢大学・経済学経営学系・教授
研究者番号：20164741

田辺明生（TANABE Akeo）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：30262215

(3)連携研究者

(4)研究協力者
（　　）